

# 町内ソフトバレーボール大会

## 前代未聞のジャンケン決着!

6月5日、20試合すべてが大熱戦の結果、なんと上宿と下宿が同率で首位。前代未聞の9人对9人のジャンケンで決着をつけ、上宿が念願の優勝を飾りました。おめでとう!

# 荒牧町だより

第168号  
荒牧町自治会  
広報委員会



いける!



イチ、ニ!



ハイ、ハイ、ハイ、ハイ!



ファイト、お~!



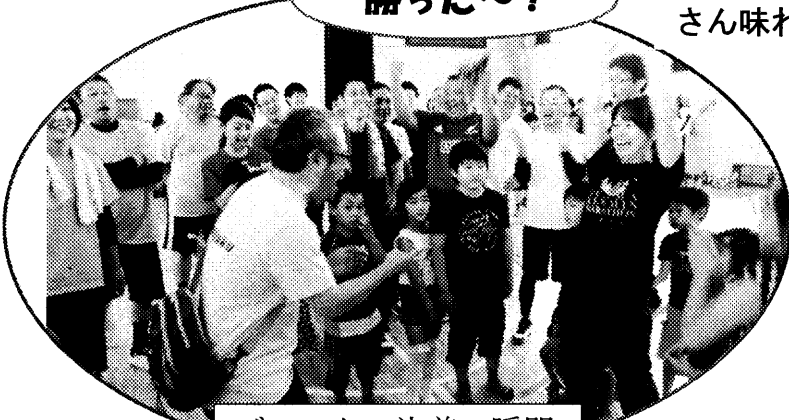
よくがんばった~!

このふれあいが  
たまらない!

町内行事の良さは、なんといっても町民どうしのふれあい。この町に住んで良かったと感じる瞬間をたくさん味わえましたね。



いっぱい食べてね!



ジャンケン決着の瞬間



優勝した上宿チーム

本年度最初の廃品回収が5月22日、暑い中、子ども会育成会の若い父母の手を中心に行われました。皆様のご協力ありがとうございました。



廃品回収

おかげさまで  
荒牧町がきれ  
いになります

粗大ごみ

5月15日、年に一度の粗大ごみ回収。数珠つなぎの車も、手慣れた係員のお世話で、次々と粗大ごみを降ろしていきます。

ここ数年ゴミの量、だんだん減ってきているようで、家々がきれいになってきているようですね。



## 第1回いきいきサロン開催 6/8

群大教授の内田陽子先生が「人生の終焉のケア」という講演をしていただきました。先生のお話はとても漫談風で面白かったので、中身は重いテーマでしたが、参加した皆さんも自分の人生の

内田先生

終焉を明るく受け止められたようです。

自分の人生の終わりのページの未来図を、今から描いておきたいものですね。



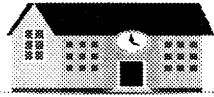
## 南橋地区グランドゴルフ大会

5月22日は、風も無く日差しが強く、30℃を超える天候のなかでの大会になりました。荒牧町からも1チーム6名が参加し10位と健闘しました。

子供達を含めた参加者が3世代交流を図りながらゲームを楽しんでいました。また、昼食のお弁当を食べながら懇親を深めていました。



## まちかど探検・40



## 桃川小学校「創立百周年記念誌」より

今から44年前、昭和47年12月に発刊された百周年記念誌には、70人余りの卒業生が「思い出」として寄稿している。

桃川小学校は市内でも歴史が古い小学校で、明治6年12月に設立された。従って寄稿された卒業生は明治末期から大正期にかけての方々の名もある。

目を通してみると、これらの古い方々の文は全部が全部正確な記憶の元に書かれた訳でもないようで、一部時間等が入れ替わっているところもある。

しかし内容的には現在では考えられない興味深い箇所もあり、桃川小学校の表には出ない一面が伺える。

(1) 私は明治四十年日輪寺にあった旧校舎（現萩原福三郎宅）で卒業した。その後大正二～三年頃友人と相談して夜学校を開いた。純農村地区であったので、一月～三月迄の農閑期を利用した勉強会で三年間続いた。

(2) 私は明治三十八年に入学した。一年後には新校舎が荒牧に完成した。その後明治四十三年に義務教育は今迄の四年間から六年制となり初めての五年生となった。

(3) 大正二年三月に尋常科を卒業した。義務教育であったが、高等科は義務教育ではなく月額二十銭を払っていた。上の学校へ進学者は少なく、級で四～五人位であった。

(4) 大きな思い出の一つに秋の運動会があった。中でも団リレーは全校挙げての力が入った競技であった。団名は当時の校訓よりとった「忠実」「勤儉」「推譲」の三団であったが、後に赤城・榛名・妙義・浅間となった。

(5) 明治三十七年に入学した私は修学旅行にも強い思い出がある。明治四十三年の六年生の修学旅行は伊香保温泉へ一泊旅行で、学校から伊香保まで徒歩で往復した。帰りの道は坂東橋の上でとても疲れ、足が非常に重かった。

(6) 小学校の六年生の修学旅行は吉見の百穴に行ったが、足を強く「ねんざ」してしまった。家族から離れた宿で、寂しさと痛さで一晩中泣いていた。

(7) 校門に向かって延命寺川が流れていた。今ではコンクリートで整備されているが、古くは草木が覆って茂

るままの小川であった。私たちは「うめじ川」と教えられそう呼んでいた。

(8) 小学校の時食料に乏しく、弁当はたくあんや梅干し位しかおかずは入っていなかった。昼ちかくなると火鉢で弁当を暖めたので、教室中たくあんの臭いがたちこめていた。

(9) 戦後食糧難の時に、小学校で豚や牛を飼っており、生徒達が当番制で餌を与えていた。ところが突然豚がいなくなってしまう。皆でしらべたところ先生方が食べてしまった事が分かった。男子生徒達はおこって日輪寺の境内に集まり一斉に登校拒否をしたことがあった。

(10) 校門を出た国道十七号線はまだジャリ道で、風の強い日には砂ぼこりがたった。この新道には鉄道馬車が走り、目隠しされた馬が「ベッコウ」のムチでおとなしく走っていた。ところがある日、田口の神社の辺りで馬車に飛び乗った男の子がベッコウにどなられ飛び降りた時に片足のすねのところがもがれてしまった事もあった。

(11) 大正十一年頃、校庭に泰安殿があり、毎日登校の際に敬礼していた。祝典の時には教頭先生がこの中から御真影と教育勅語を出してうやうやしく捧げ、肩をいからせながら歩く姿が目には浮かんでくる。この泰安殿は戦後には上細井の消防署の向かいの八幡山に「南橋聖霊廟」として保存されているとの事である。(写真：右)

\*\*\*\*\*

これらの寄稿文から日清・日露戦争に続き、日本中が焦土と化した大東亜戦争を経験した方々の生々しい体験や苦労が特に目を引く。

確かに明治時代の後半から大正・昭和25～6年頃までは、わが国の大部分の国民は貧しかった。児童・生徒は碌な衣服も着られず、弁当も梅干しや沢庵が精々であった。親達も育児に大変は苦労をした様子が伺える。子ども達の遊ぶ所も川や沼・林等に限られていたが、大変な状況の中でもどことなく大らかで暗い雰囲気はさほど感じられない。皆が苦労をする中で助け合いや繋がりがあった。こうした事により僅かな年月の間に世界中を驚かせた経済大国へと我が国は登って行ったのではなかろうか。

(赤松)

